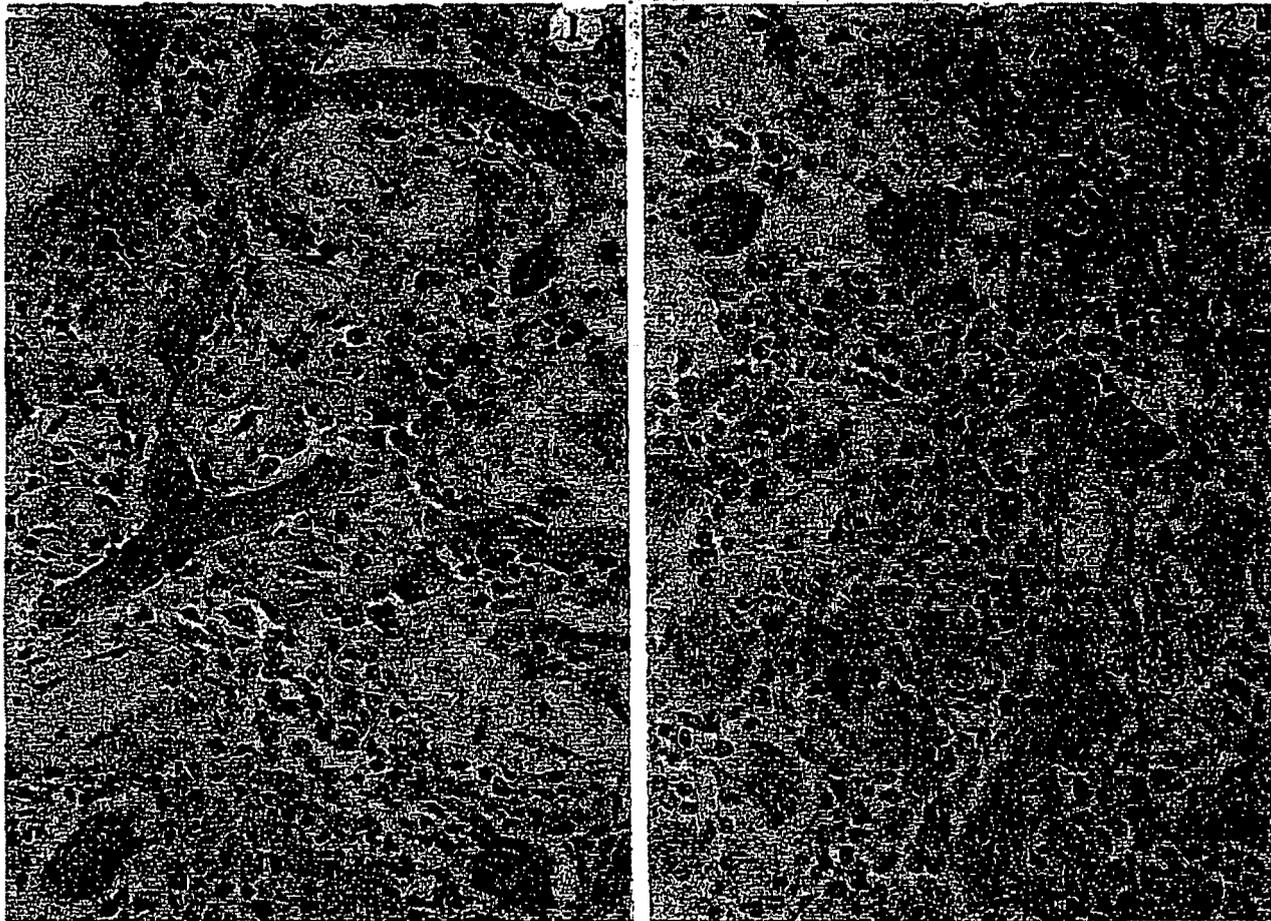


牛の骨原性肉腫

北里大学畜産学部獣医学科 第11回獣医病理研修会標本 No.165



症例並びに主要肉眼的所見：日本短角種、放牧成牛、牝、青森県産、1970年11月27日十和田市屠畜場殺、左側第1～3肋骨両側面に38×23×20cm大、重さ約7kgの腫瘍塊を認めた。表面は強靱な結合組織性被膜で囲まれ、断面は著るしく血液にとみ、第2肋骨は完全に崩壊し両端にわずかにその形状を残すに止っていた。腫瘍中心部は暗赤乃至赤褐色で梁状～蜂窩状構造を示し、骨梁の形成が著明であった。

組織的所見：本質的組織所見は多核巨細胞及び間質細胞の肉腫性増殖とか、る細胞による直接の類骨及び骨質の形成であるが、まず目を惹く所見は間質と同じ性状の核を備えた多核巨細胞の著明な増殖である。巨細胞に富む領域では骨化機転はそれ程強くなく、又間質細胞の増殖も著明でない傾向にある。しかしミトーゼ及び異型性を伴う間質細胞の増殖域では、その細胞が造骨細胞としての機能を発現してosteoid (類骨組織)の沈着を示している(図1、×560)。即ちosteoblasticな変化が著明になるに従い巨細胞は変性に陥り、数が減少する傾向にある。一方造骨細胞の増加と共に骨化機転は著明になり、骨様

組織は石灰沈着を伴って骨組織に發展している。又巨細胞にはosteoclast性活動がみられ、巨細胞が骨梁に接した所ではHowshipの吸収像がみられる(図2、×560)、以上の組織像は大きく巨細胞増殖域、巨細胞退化一骨芽細胞増殖類骨組織形成域及び骨質形成域に分別され、一枚の組織切片の中でもこれら組織像が複雑に混在して認められることは一つの特徴といえる。

今回の提出標本の本質的な所見は造骨～骨芽細胞の肉腫性増殖とか、る細胞による直接骨形成であり、部分的な多核巨細胞の多数出現は巨細胞腫に比する組織像であるが、lyticな性格に一致するものであると解される。即ち本症例に対して、第2肋骨の複雑骨折所見を重んじ、巨細胞の増殖は、骨損傷治癒における骨化と再構成という一連の複雑な過程の中での部分的表現であり、本態的病変は飽く迄も造骨～骨芽細胞の肉腫性増殖及びこの腫瘍組織による直接の腫瘍性類骨及び骨質の形成であると看做したい。

組織学的に“第2肋骨の複雑骨折を伴った骨原性肉腫”なる診断名を与えた。